

恋愛パズル

K a n a k o & M a s a r u

知念みづき

Mizuki Chinen

ternity



エタニティ文庫

プロローグ

物が少ないのに雑然として見えるのは、引越しの荷物が片付けられていないせいだろうか。

部屋の主はベッドに寄りかかり、片膝を抱えたまま微動だにしない。まだカーテンが付けられていない窓に、どこからともなく飛んできた枯れ葉がぶつかって落ちる。それをなんとなく目で追ってから、再び視線を戻した。

「将……」

名前を呼んでも反応がない。引越しをしても、まだあの人は将を苦しめている。将の笑顔を最後に見たのはいつだろう。どんなときも笑顔で場を盛り上げてきたのに、今の彼には表情がなく、心もどこかへ行ってしまった。

将の足をオレンジ色に染めていた夕日が、窓に吸い込まれるようにその照射範囲を縮めていく。立冬に向けて少しずつ日が短くなり、秋の訪れを感じさせていた。薄暗くなつた部屋に寒さを感じるのは体感温度のせいだけではない。

「今度、久高君が紅葉狩りにでも行くって」

できるだけ明るく声をかけて、将に近づく。そして、あと一步の距離を残して立ち止まり、将を見下ろした。こんなに苦しんでいるのに、私は何もできない。

きゅつと唇を噛みしめて、自分の不甲斐なき、無力さを悔しく思う。十年以上友達をやつてるっていうのに、何の役にも立ちやしない。

かすかに将の髪が揺れた。目の錯覚かと疑った次の瞬間、スローモーションのように将がゆつくりと顔を上げていった。伸びた前髪に隠れる顔半分。はらりと落ちた髪の毛の間から見えた将の瞳。瞳は私を映しているのに、将は私を見てはいない。虚ろな瞳は私ではない何かを見ている。

どのぐらいの時間だろう。将と私は見つめ合っていた。コチコチという時計の音がやたらと耳に残る。張り詰めた空気の中、将が息を吸った。

「……夏菜子」

掠れた声（か）が私の名前を呼ぶ。部屋が静かだからこそ聞き取れるぐらいの小さな声。

「なに？」

深呼吸をするように、肺に空気を取り込み、静かに返事をした。

「前の部屋では麻里の面影に縋（すが）ってた」

将の口からあの人の名前が出ると、胸が苦しくなる。でも、口にしてはいる将は私以上

に苦しそうに見えた。

「この部屋には何も無い。……麻里の面影も、……思い出も」

あの人と一緒に住んでいた部屋にいたら、将はいつまでもあの人の影に囚われたままだった。だから、半ば強引に引っ越しを勧めたのに。

「……情けないだろ。男のくせに」

嗚咽（おと）の混じり始めた将の声に、こちらの涙腺が先に駄目になりそうだった。『将は情けなくなかない』、そう伝えたいのに、声にすると泣き出してしまいそうで、必死に首を横に振る。

「一人でいることが……、誰もいないことが……無性に寂しいんだ」

絞り出された声（こゑ）が今の将の全てを物語っていた。家に誰かいるのが当たり前前の生活が続き、それを失い——その場所も失った。

どうしても将に会いたくて、引っ越し祝いを渡すなんて口実（くわい）でやってきたけど、まさかこんな状態になっっているなんて思ってもいなかった。

手にしていた荷物を床に下ろす。将が今にも消えてしまいうように思えて、その場に膝をつく、存在を確かめるように彼を両腕で包み込んだ。私のほうが小さいけれど、片膝を抱え込んでいるおかげなのか私の腕でも間に合ってしまう。

「一人じゃないよ。私がいつでも傍（そば）にいるよ。だから……」

戻ってきて。いつもの将になってよ。笑顔を見せてよ。

言葉にならない思いが次々に胸に溢れてくる。初めて感じる将のぬくもり。こんなふうに触れたことは今までなかった。

「毎日というなら、毎日来る。夜が寂しいというなら泊まる。ぬくもりが欲しいなら……それも。私にできることなら何でもするよ」

私は将が元に戻るならどんなことだって……。私にとって、将は友達以上の存在だから。肌と肌が触れ合うぬくもり。それ以上のことだって構わない。

「夏菜子……？」

私の言葉に将の声が困惑に揺れる。こんな状況なのに、ようやく私の存在を認識してくれたことが嬉しいと思ってしまう。

「私、ほら今は彼氏いないし、こんなこと言うとか変かもしれないけど、女だってたまには……そういう気分になるときもあるっていうか……」

しどろもどろになりながらも、すごいことを言ってしまう。急に恥ずかしくなって、ぱつと体を離して将を盗み見ると、俯うつむいて何かを考え込んでいた。

「私なんかじゃ駄目か。ごめん。変なこと言ってる。でも、将のためにできることなら何でもするって言ったのは本当だから」

私の言葉を将はどう思っただろう。軽蔑したかな。それとも……

「そんなこと言われたら……、夏菜子を利用するぞ」

暗くなった部屋で、正面から私を見ている将の目にほんの少し光が宿った。

「……いいよ」

本当にこんな方法がいいのかわからない。この状況を利用しているのは将じゃなくて私。近づきたくて、弱みにつけこもうとしている。

「優しくできなくてもいいのか？」

「……うん」

一つ一つ確認する将に私はすべて肯定していく。自分から望んで、そう仕向けた。だから、後悔はしない。

日が沈み暗くなった部屋の中、互いに言葉はなく、衣きぬ擦すれの音だけがやたらと耳につく。ブラジャーとショーツを残しただけの姿になり、同じくトランクス一枚になった将に視線を向けた。

「本当にいいのか？」

「いいってば。ほら、セフレってあるじゃない。あれと一緒に。割り切ろうよ」

自分で言っていて嫌になるな。私は将を好きな気持ちを隠しているだけで、全然割り切れてなんかいないのに。寂しさを埋めるために体を重ねる将と、好きな相手を騙して

体を重ねる私。どっちのほうが悪いかな。

ベッドに並んで座ると、私は将の腕に包まれた。その腕に手を添えて、思考を止める。ずっと望んでいたぬくもりを手に入れる……。今はただそれを感じよう。

一生触れることはないと思っていた将の肌。あたたかな手が私の背中を撫でる。存在を確かめるように。もう涙は零こぼしてはいないはずなのに、将がまだ泣いている気がした。ここまで将の心を掻き乱すあの人を恨む気持ちはある。でもそれ以上に羨うらやましかった。姿を消してもなお、将の心を捕らえたままなんて。

「将」

名前を呼んでも返事はない。首筋に柔らかな感触がして、それが将の舌だと理解した瞬間、体が強ばった。

こんなことを言い出しておいて、経験不足というのは致命的かもしれない。将が負担に思わないように軽く提案してみたけど、私の過去の経験は二人。そのどちらも、半年と続かず別れてしまっている。そう考えたら、二十九歳という年齢にしては少ないほうだろう。正直、体で慰めるなんて、全く自信がない。それでも、将がこの状況から抜け出せるのなら、そのきっかけになるのなら。

「んっ……」

過剰な反応をしないようにと思っていたのに、将の手が胸に触れた瞬間、声が漏れて

しまった。ほんの一瞬、将は動きを止めたけど、何も言わずに再び手を動かす。

付き合っている人に抱かれながら、これが将だったらどうなるんだろうって考えたことがあった。今、それが現実になっている。両思いになったわけでもないのに。

「んん……っ」

シヨーツが引つ張られる感覚に腰を上げると、するりと足から抜かれた。次いでブラジャーが外される。少し肌寒さを感じて、自分の腕をさすった。

「寒いか？」

「ううん。平気」

お腹を撫でる将の手の平から伝わる熱。手が温かい人は心が冷たい、なんて聞いたことがあるけど、それって本当かもしれない。だって将の心は、ここにはない。

トランクスを脱いだ将がほんの少しの隙間もないぐらいに密着してくる。全身で将の体温を感じた。抜け殻になってしまっても、ちゃんと将の心臓は動いている。私の胸に感じる鼓動。

「俺、最低だな」

ポツリと将が呟いた。私の肩に頭を預けたまま、将はかすかに震えている。その背中に両手を回して少しだけ力を入れた。

「今はいいんだよ。何も考えなくて」

将に言い聞かせながら、その言葉を自分にも向けていた。裸で抱き合ったまま、静かに時が流れていく。将の体温のせい、この状況のせい、気付けば肌寒さはなくなっていた。お互いの体の境目がわからなくなりそうな一体感に身をゆだねていると、ふいに将が動き出した。

「やめたほうがいいってわかっているけど、やめられない。このまま、抱くぞ」

「……うん」

体の位置を変える将。そして、一際熱くなった部分が腿に触れた。私に反応してくれたのだと思うと、ほんの少し嬉しい。

将の膝が私の足を割り開き、手が潜り込む。あまり触れられたことのない部分を将の指がなぞった。

「ん……くう……」

潤いが足りないのに、指がつつかかりながらも奥へと入ってきて、かすかに痛みを感じる。「もっと優しくして」と出かかった言葉を呑み込み、じつと耐える。これは恋人同士の繋がりではない。だから、気持ちよくなるなんて思っちゃいけない。

少しずつ滑らかになっていく指の動き。水音が聞こえ始めると、すつと指が引き抜かれた。

「……ゴム」

引越しの手伝いをしたとき、偶然目にしたのはゴミ箱に捨てられた避妊具の箱。彼女との関係を思い出させるものを残すのが辛かったのだろう。したがって、この部屋にゴムはない。

「平気、私ピル飲んでるから」

ひどい生理痛に悩まされていた私に、友人の咲季が勧めてくれたのがキツカケ。相性があると言われたけど、私の場合は副作用もなく、生理痛はかなり軽減された。日常生活に支障が出るほどの痛みだったから、そのままピルを使い続けている。このことを付き合った相手に言ったことはなかったのに、将には迷うことなく言えてしまった。

眉間に皺を寄せ、少し考えてから将は首を横に振った。

「万が一があると困るから」

苦しげに零した言葉を聞いた瞬間、私の脳裏にあの人が浮かんだ。あの人が将から去った理由。

「そうだよ。一つだけならあるから」

床に置いたバッグへ視線を向けると、将が上からどいてくれた。ベッドから降りて将に背を向けた途端、目頭が熱くなる。涙をなんとか堪えて、免許証入れにしているカードケースからゴムを取り出した。咲季が「避妊は男に任せてはっかりじゃなくて、女もちゃんと準備しておかないと駄目だよ」と無理やり持たせてくれたのだ。気持ちを少し

落ち着かせて、私は将を振り返った。

「んんっ……」

ゴムが内壁を引っ張る。ちよつとの間に乾いてしまったのか、指を入れたときよりも痛みを伴う挿入にギュッと目を閉じた。

「……キツイな」

なかなか奥に進まないことに、私のほうが申し訳ない気持ちになるが、将はやめることなく押し進もうとする。引き攣られるような痛みを伴いながらも、私の中は徐々に将のもので満たされていった。時間をかけて、ようやく全てが入りきると、将が申し訳なさそうな顔をして私の様子を窺った。

「大丈夫か？ なわけないよな。本気で悪い」

「あやまりすぎだよ」

精一杯の虚勢で笑ってみせると、将の顔がほころんだ。言葉にすれば苦笑といったところだけど、それでも将が笑うのを見るのは久しぶりだ。

「将……」

「俺、だせーな」

いつもの口調。堪えていた涙が頬を伝った。

「夏菜子？」

親指で不器用に涙を拭ってくれながら、将は心配そうな面持ちで私を覗き込んでくる。将に心配させるなんて、こうする意味がなくなっちゃう。それでも……

「嬉しいの。将が戻ってきたみたいで」

私が少しは役に立てたことも、将が私の心配をしてくれることも。好きな気持ちがまた増えてしまう。増え続けた気持ちはどこへ行くのか、いつか救われるときが来るのか。「そうか……こんなときに悪いけど、もう一つ最低なこと言ってもいいか？」

「なに？」

「動いてもいいか？」

私は笑って、また零れた涙を拭った。涙が止まらないのは、笑いすぎてるせいなのか、別の感情のせいなのか。深く考えないようにして、将に頷き返す。

会話が再びなくなっただけど、さっきまでよりも軽い雰囲気だ。将の背中に手を回すと、彼の肌は汗ばみ始めていた。受け身になっている私にはない熱さ。額に小さな汗の粒を浮かべている将が愛しいと思う。

「ん……いいっ……」

痛いばかりだったのが、いつの間にか気持ちよさに変わっていた。将を受け入れてくれる。繋がっている。勘違いしてしまいそうな瞬間。でも、今だけ、恋人になったつもり

になったら駄目？ 虚しくなるだけだとわかっていても止められなくなる。

「まさっ……るっ……」

「駄目だ……、出すぞ」

「うん……いいっ……よ」

激しさを失った将が覆いかぶさり、火照った肌が私の肌に触れる。もう、引き返すことはできない。なかったことにもできない。私は自分で選んでしまった。だから、このまま進み続ける。

高校時代の終わりに切れてしまった将との繋がり。成人式で再会し、再び手にした繋がりをもう失いたくない。

薄れそうになる意識の中で、私は将と再会してからのことを思い出していた。

一 成人式の再会

うっすらと雪が積もった白い景色の中、彩り豊かな着物を身に纏った人々が履き慣れない草履ぞうりにおぼつかない足取りで会場へと向かっている。駅からすぐの市民体育館には、新成人たちが集まっている。高校のときの同級生から連絡が来て、体育館の前で待ち合

わせをしたけど、狙い澄ましたように降った雪のせいであたりは混乱していて、合流するのは難しそうだ。

高校を卒業した年には頻繁に会っていたのに、一年も過ぎると次第に連絡の間隔はあき、最後に会ったのは半年前になる。少し前に、雪で電車が遅れているから遅くなるとメールが来た。他にも何人かに声をかけていると言っていたが、携帯の番号もわからない友達と合流する手立てはない。

「あれ……？ 麻生さん？」

背後から呼びかけてきた声は男性のもの。今日初めて再会する知り合いにドキドキしながら振り返った。

「やっぱり。さっき、ちらっと見かけてそうかなって思ったんだけど。僕のことわかる？」

「もちろん。久高君でしょ」

すぐドキドキしていた。成人式のお知らせを受け取ってからずっと、もしかしたらアイツに会えるかもしれないと、心のどこかで期待していた。久高君と顔を合わせたことで、その期待が確信に変わる。高校時代、久高君とアイツはいつも一緒だったから。

「おいっ！ さる」

久高君が一步横に動く、後ろからスーツにコートを羽織った男性が現れる。

「ほら、麻生さん」

久高君に言われて驚きの表情をしたアイツは、私を見て少し気まずそうな顔になった。私には顔には出さずに落胆した。最後に言葉を交わしてから、どれだけ経っただろう。記憶の中では制服姿だった彼が、少し大人びた顔になってスーツを着ている。やっぱり……これまで私が好きになった人で一番素敵かも。

木村将。私が片思いをして、振られた相手。そして、その後の恋愛にも影を落とすとしてきた奴。

「馬子にも衣装じゃん」

ボソツと横を向いて呟いた一言。

「うるさい。さるもスーツで人間らしく見えるわよ」

反射的に言い返してしまった。昔のように、言葉がポンと出て、私自身も驚いている。だって、もう軽口を叩き合うことはないと思っていたから。

「おい、いい加減に『さる』はやめろよ。もう二十歳だぞ」

「なによ。二十歳になったって中身は全然変わってないじゃないのよ！ ちよつとは久高君を見習いなさい」

「それを言うならお前だって格好だけじゃねーかよ。隼人は昔からおつきさんくさいんだよ。そんなのを真似できるかってーの」

次々と強い口調で出てくる私の言葉。それに対してテンポよく返してくるさる。失っ

てしまったと思っていたものが、こんなにもあっさりと戻ってきた。

「所詮、さるはサルよね。久高君、いくら幼馴染でもこんな低能といったら久高君まで汚染されちゃうわよ。縁切ったほうがいいって。ほら、成人式だし、ここは心機一転、新たな人間関係を築いて」

「うるさいバカナ。さるじゃなくて、将だー」

久々に呼ばれるあだ名に腹立ちはない。失礼極まりない呼び方だけど、それが出てきたことがちょっと嬉しい。

「久高君だって、『さる』って呼んでるじゃないの」

「こいつは、小学生からの付き合いだぞ、今更直せないだろ。でも、お前には呼ばれたくない」

高校生の頃、将の後ろ二文字を取って『さる』と呼ばれていた。私もずっとそう呼び続けていた。身の軽さもサルそのもので、久高君と一緒にサッカー部に所属していた。

「じゃあ、なんて呼べばいいのよ」

「普通に将でいいよ」

下の名前で男性を呼ぶなんて、あまりしたことがない。本当に呼んでいいのか一瞬だけ悩んでしまう。

「私もお前とか、バカナとか呼ばれたくないし、夏菜子でいいよ」

本当は『まさる』って呼びかけてみたい。でも言い出すキツカケが掴めない。下の名前前で呼ぶだけなのに、らしくもなく緊張している。

「じゃあ、僕は夏菜子ちゃんでもいい？」

今まで黙って、私たちのやりとりを見ていた久高君がふいにそう言って、私に笑顔を向けた。浮き足立っていた私は少し冷静になって、久高君の発言を意外に思いながらも頷いた。

高校時代に久高君が私以外の女子と喋しゃべっている姿はあまり見かけなかった。かといって、私と特別仲が良かったわけでもない。ただ単に私がさると仲がよかつたからって理由だと思う。

「おいっ！ こいつに『ちゃん』なんて不要だろう！ 夏菜子で充分だ」

「うっさいわね。ずっとさるって呼ぶわよ。……将」

不自然だ。思いっきり不自然に名前を呼んだ。でも、今口にしておかないと、もうその呼び方はできない気がして必死だった。呼んでしまったことで急激に恥ずかしさが込み上げる。そして、さつき将が私を呼び捨てにしたことにも。

「ところで夏菜子ちゃんは一人なの？」

私の動揺を知ってか知らずか、一人冷静な久高君が質問を投げかけてくる。

「愛と……須藤って覚えてるかな？ と、待ち合わせしたんだけど、この雪でさ」

「覚えてるよ、須藤さん。仲よかつたもんね。僕たちはさるの両親に送ってきてもらったから平気だったんだけど、電車組は大変みたいだね」

全く動いていないわけではないわけではないんだけど、雪の上に、成人式で人が多いせいか、いつも以上の混乱を招いているようだ。

「そろそろ式典始まるみたいだけど。須藤さんたちが来るまで僕たちと一緒にいる？」

心の中では何度も頷いていた。将との会話はケンカ腰だけど、まるで昔に戻ったみたいで嬉しい。バカみたいに言い合えることが、やっぱり楽しかった。

「夏菜子なんて放っておけよ。っていうか、式典参加すんのかよ。話なんか聞くのかつたりーし」

久高君はともかく、将が市長の挨拶なんて大人しく聞いているとは思えない。

「外が晴れてればいいけど、朝方やんだばつかりの雪に曇り空じゃ、寒すぎる。体育館の中のほうが暖かいし、せっかく来たんだから式典に参加したほうがいいだろ」

いつも二人はこんな感じで、面倒くさがりの将を久高君が引つ張っていた。久高君は少し真面目で堅すぎるときもあるけど、二人はそれでバランスが取れている。

「今日は久々の面々に会うのを楽しむ日だろ」

「それは式典のあとでもできるし」

穏やかな久高君も付き合いの長さなのか、将には強く言うし、不思議と将を言い負か

すときが多い。

「そういうわけかどうか？」

私も将と一緒に、式典には出ずに久々に再会する友達と喋っているものだと思っていた。しかし、その友達とも合流できない今、寒さのせいで体はかなり冷えている。それに、足袋の先が雪で濡れてしまつて冷たい。

「邪魔じゃなければ、一緒でもいい？」

「邪魔、邪魔ー」

茶化すように言う将を久高君が一瞥した。将はすぐに口をつぐみ、視線を逸らして口を尖らせる。そんな将を久高君と二人で笑い、私は将と久高君の後ろについた。冗談を言い合いながら歩く姿は当時のままで変わっていないかった。でも、卒業から二年、大した成長はしていないはずなのに、不思議と背中が大きく見える。

会場に入ると、ほとんどの新成人が後ろの席に陣取り、自分たちの会話に花を咲かせている。なんとか見つけた三つ続きの空席は真ん中よりも少し前のほうだった。

久しぶりの再会を果たして、さらには将の隣に座っている。緊張しないわけがない。いつもより気合の入った化粧に加えて、館内の照明は舞台上に集中してるから、赤くなつた顔に気付かれる可能性は低いだろう。

実は、少し前にバイト仲間から告白されて、何度か一緒に出かけていた。まだお話し

期間みたいな感じでハッキリと返事はしていない。将に告白をして振られて、その思いを引きずつたまま二年が過ぎた。いい加減吹っ切るつもりで、バイト先の彼にOKと返事をしようと思つていたところだった。

でも、彼と一緒にいて、こんなにドキドキしたことはあつた？ 思つたこと何でも彼に言えた？

恭しく始まつた式典。ざわめきは多少小さくなったが、それでもおしゃべりはやまず、あちらこちらから小さな声で会話をしているのが聞こえてくる。隣に座る将も久高君と話をしている。

「女子って、今日集まつたりするのか？」

「んあ？」

暗がりに乗じて見つけていた将が急にこちらを向いたので、思わず女の子とは思えないような声を出してしまった。慌てて口を手で塞いでみたけど遅いよね……

「お前さー、そういう返事からしてガキだよな。まずはそのあたりから大人になる努力が必要だな」

「急に話しかけてくるほうが悪いんでしょ」

あの返事は自分でもないと思う。でも、大人になれと言われればカチンとくる。この

辺が子供の証拠なのかもしれない。

「で、なんの話よ？」

上の空だったから、全然耳に入っていない。気付けば久高君もやや呆れた感じの笑みを浮かべていた。薄暗くてハッキリと見えるわけじゃないから、私の思い込みかもしれないけど。

「女子は同窓会みたいなのあるのか？ って話だよ」

「ううん。特に聞いてないけど、集まれば、流利的に行くんじゃない？」

専門学校の友達は事前に同窓会の連絡があったみたいだけど、うちの高校はそういうのはなかった。でも、愛の性格を考えれば、会場で顔を合わせただけで終わりってことはない気がする。多分、ゆっくりと話ができるところに移動して、飲むなり食べるなりしようと言いつ出すはず。

「こっちはメールが来て、飲み会をしようって話になってるから、お前、女子に連絡しろよ」

「別にいいけど……」

予想外の展開に不機嫌そうに答えながらも、心の中ではガッツポーズをしていた。だって、将とはこの場で会って、それきりになると思ってた。だから、この隣に座れている時間を大切にしようとか考えて、じっくり観察までしていたのに。このあとも一緒にい

られるなんて、連絡でもなんでもするよ。

急いで携帯を取り出すと薄暗がりの中、指先の感覚だけでメールを作成する。ディスプレイに表示される文字を見ながら、落ち着くように自分に言い聞かせ、文章が完成するとすぐに送信ボタンを押した。

「こっちは連絡したよ。多分、愛が女子の連絡先とか結構知ってるから、大丈夫だと思っけど」

「お前、友達いなそうだな」

「うるさいなあ。久高君とばかり一緒にいる将に言われたくないわよ」

べーっと舌を出して文句を言えば、将も似たような反応をしてくる。このバカっぽいやりとりすら楽しいと思うのはやっぱり好きだから、だよな。

愛から会場に着いたって内容と、飲み会はもちろんOKという返信がすぐに来た。何人もの挨拶に新成人代表のスピーチ。聞き流しながら、早く終わらないかと待ち遠しく思っていた。一時間ばかりの式典が全て終って、外に出ると、さきほどよりもさらに人が増えていた。私は愛に会うため、将と久高君は他の男子と会うため、一度別れることになった。

そのときにあとで連絡が取れるようになって、二人と連絡先の交換をした。私の携帯には未練がましく高校時代の将のアドレスが残っていて、新しい連絡先を登録した私はす

ぐにそれを消去した。

電車で遅れていた人も到着しただろうし、体育館にいた人も外に出た。ごった返すなか、愛はメールで言った銅像の前に四人の女子と一緒にいた。

「久しぶりっ！ って、あんまり変わってないじゃん。変わったのは着てるものだけ？ もー、電車混んで、足とか踏まれるし最悪だよ。こっちは着物で身動き一つするのも大変なのに、押されたりさー。あ、そうそう、みんなにメールしておいたよ。結構、集まりそうな感じ。で、男子って言い出したのは誰なの？」

愛は久しぶりとは思えないテンポのよさで一気に喋り出す。

「えっと、さる……将から言われたんだけど、将も別の男子から連絡が来たみたいな感じで、誰だか聞かなかったや」

「まー、誰でもいいよ。こんな機会だしさ。事前になんの企画もなかったから、当日に連絡が取れてラッキーじゃん。で、時間とかは？」

「それも聞いてない」

「駄目じゃん。せめて、場所と時間。ほら、すぐに確認して」

言われて、さっき入手したばかりの新しい将のメールアドレスを表示させた。これで、メールが届くんだよ。嘘みたいだけど、本当だよ。こんな気持ちはまだ自分の中にあっただのかと思いつつ、将のアドレスを眺めてしまう。高校時代と同じく、アルファ

ベットの合間に顔文字みたいなものがあるアドレス。

私も真似して顔文字を入れたんだけど、将に気付かれるかな？ なんか、それで引きずってるのがばれるのも嫌だけど、全く気にされないのも寂しいな。

「ちょっと、手を動かさないとメールが打てるの？」

私の携帯を覗き込んできた愛は真っ白な本文を見て、ため息をついている。

「ほら、女子のほうはどんどん返事来てるし、早くして」

「ごめん。急ぎます」

自分の世界に入り込んでいる場合じゃなかった。将にメールをすること自体、高校生るとき以来だから、どんな調子で書いていいのか、それすら悩んでしまう。結局のところ、素っ気ないまでに端的なメールになってしまったけど、愛に急かされてそのまま送信した。

それが終わると、愛と一緒に来た女子と少し話をする。卒業以来顔を合わせていなかった子もいて、やっぱり高校時代の話題になる。話が盛り上がったところで、携帯の着信メロディが流れた。慌てて携帯を開けば、将からの電話だ。

取り落しそうになった携帯をしっかりと掴み直し、通話ボタンを押す。

「も、もしもしっ」

『なに俺の真似してアドレスに顔文字入れてんだよ』

「真似じゃないわよ。第一、将のと全く一緒ってわけじゃないし」

『まー、いいけどな。時間と場所、決まったぜ。あと、サッカー部の連中に会ってさあ、そっちのメンバーも誘ったから』

男子のほうはクラス以外の人も合わせて、十人近くが集まっているらしい。集合時間と大体の場所を聞いて将との電話は終わった。その内容を愛に告げると、愛はすぐにメールを始める。

「女子は何人ぐらい集まりそう?」

「んー、まだハッキリしてない。違うクラスの子も何人か来るけど大丈夫かな?」

「大丈夫でしょ。将もサッカー部のほうに声かけてたみたいだし」

愛は卒業後もママに連絡を取っていたみたいで、こうやって連絡の中心になってくれる。

「そっか、ならいつか。今のところは十二、三人かな」

その後、さらに女子が二人ほど合流したので、とりあえず近くのファミレスに向かった。お茶をしながら休憩をして、一度解散となる。

お母さんに連絡をして迎えに来てもらい、家で振袖を脱ぐと、解放感から下着姿のままカーペットにごろりと転がった。

「ちょっと、お父さんだっているんだから、そんな格好で寝転がらないでよ」

振袖を畳むお母さんを眺めながら、成人式であったことを頭の中でリプレイする。すぐに浮かぶのは少し精神まじなになった将の顔。文句を言う顔や、笑った顔など、いろいろな表情の将がぐるぐると巡ってゆく。

「もう、夏菓子。思い出し笑いなんかして気持ち悪いわよ」

「いいー」

「なによ。成人式で初恋の彼にでも会った?」

「違うわよ! そんなじゃないの。ただ、久しぶりに高校時代の友達に会ったから楽しかっただけだよ」

まさかの凶星をお母さんにつかれて、私は慌てて言い訳を並べる。「ふうん」と返事をしたお母さんの顔が「知っているのよ」と言っているみたいで、私は居心地が悪くなかった。

「着替えてくる」

「やっと、その気になったの。もー、本当にこれで成人したっていうんだから不思議よ」今日はなにかと子供扱いをされる日だ。確かに自分の行いが大人かと問われれば、胸を張って大人です、とは言えない。それでも、少しずつ成長しているつもりではいる。

三月には専門学校も卒業。これでも就職の内定だって取れてるし、無事にいけば春には晴れて社会人。

そういえば、将はこのあたりではかなりいいレベルの大学に進んだはず。久高君も一緒のはずだけど、あれだけサッカー馬鹿だったのに、大学に合格できちゃったんだから不思議だよなあ。私はとにかく勉強がしたくなくて、大学への進学は考えなかったけど、飼っている犬の美容室にお母さんと一緒に通ううちに、私のやりたいことになっていったトリマーというお仕事。将はどんな仕事するのか？ 今日みたいにスーツを着て、働いてたりして……

なんか、さつきからずっと将のことばかり考えてる。クローゼットから洋服を引っ張り出して袖を通すと、すぐにリビングに戻った。またリビングでゴロゴロしたら文句を言われそうだけど、部屋は寒いしテレビが観られない。

「やっと着替えてきたわね」

お母さんは畳み終わった振袖を和紙っぽい袋にしまっていた。

「この着物って買ってもらって嬉しかったんだけど、また着ることってあるのかなあ？」
すぐ傍に座り込むと、お母さんから髪飾りの箱を渡され、テーブルに置きっぱなしにしてあった髪飾りを片付けてゆく。

「あるでしょう。夏葉子が結婚するまでは着られるわよ。それとも、もう結婚する相手でもないの？」

「い、いないよ。まだ二十歳だよ。学生だよ。結婚なんて……」

ずっと黙ってテレビを見ていたお父さんがわざとらしく咳払いをするから、私は慌てて声をひそめる。

「ちよっと、お父さんがいる前でやめてよ」

「いいじゃない。どうせいつかお嫁に行くんだし。でも、その様子じゃ、付き合ってる相手もないんですよ」

お母さんと恋愛の話なんて滅多にすることがない。今日のお母さんはちよっといつもと違う。

「その気になれば、彼氏だってできますー」

意地になって答えた瞬間、告白してきたバイト仲間が脳裏に浮かんだ。すっかり忘れていたけど、私が「うん」と言えば、彼氏、彼女の関係になれるんだよね。でも……そんな簡単な方がいいのかな。もっと、ドキドキとかワクワクとか、そういうのがあるべきなんじゃ……

「あら、そんな人がいたなんて初耳」

「いちいちお母さんに言うわけないじゃん」

「まあね。でも、夏葉子の振袖姿を見てたら思い出しちゃった。お父さんと初めて会ったときのこと」

振袖をしまったお母さんの表情は何かを懐かしんでいるようだ。私の振袖を通して別

のものを見ているようにも見える。

そういうえば、お母さんとお父さんの出逢いも成人式だったって聞いたことがある。知り合って二年で結婚して、すぐに私が生まれたはず。今まで、あまり詳しくは聞いたことがなかった。

「別に同じ中学とか高校だったわけじゃないんだよね？ どうして成人式で会ったの？」

再び、後ろでお父さんが咳払いをしたけど、そこは聞こえないふり。

「お父さんが飲んでいた缶コーヒーがお母さんの振袖にかかっちゃったの。それで、お父さんつたらすごい慌てちゃって」

くすくすと笑うお母さんは「母」ではなく、恋愛について語っている友達と同じ表情をしている。もう何十年も前のことなのに、こんなふうに思い出せるなんてちよつと羨ましいかな。

「今すぐ脱いでくださいって」

「え？」

思わず聞き返してしまった。お母さんは楽しそうに笑いながらお父さんをチャリと見る。

「それは……気が動転してたんだ」

耐え切れなくなったのか、ついにお父さんが口を挟んできた。

「すぐに染みを落とさないと駄目だと思って……」

こんなお父さん、見たことがない。頭ではわかっていたけど、お父さんとお母さんにも恋人同士だった時期があったんだよね。

着物のことなんかわからないお父さんはお母さんの家まで付いてきて、着物を弁償しようとしておばあちゃんに笑われたらしい。結局、クリーニング代でそのときは収まったけど、それから連絡を取り合うようになって、お付き合いが始まって結婚まで。

「結婚するって、何か確信みたいなのはあったの？」

「どうかかな？ でもね。ぶつかってコーヒーがかかったときに、うるたえるお父さんを見て、この人とはまた会うなってなんとなく思ったの」

テレビを見ていたはずのお父さんは、新聞紙を広げてこっちは顔が見えないように隠れてしまっている。お父さんが照れている……？

「お母さんの振袖は親戚からのお下がりであったんだけど、結局一度しか着なかったのよ。だから、夏菜子にはこの振袖をたくさん着てほしいわ。あ、でも花嫁姿を見られないのは寂しいから、適当なところでいい人を見つけて結婚してちょうだい」

「はい」

着物は着ていると苦しいし、鼻緒ですれてしまつて足も痛い。でも、スーツやドレスとは違つて身の引き締まる感じがした。

「私、着物、そんなに嫌いじゃないよ」

「あら、じゃあお友達との結婚式とかお正月とか、どんどん着てちょうだい。お母さんが着付けしてあげるから」

その昔、結婚式場の衣裳室じしょうぶで働いていたお母さんは着物の着付けはもちろん、簡単なメイクもできる。だから、今日だってお母さんが着付けにメイクに髪までもやってくれた。

「お父さん、お母さん。着物、買ってくれてありがとう」

「どういたしまして」

にこりと微笑むお母さんに、お父さんの咳払いが一つ。

お母さんに、改めて髪型を整えてもらってから、自分の持っている服の中で一番気に入っているコーディネイトを選び、二十歳のお祝いにと買ってもらったファー付きのコートを羽織った。

「じゃあ、行ってくるね」

「遅くなるのはしょうがないけど、帰りの時間は連絡を入れること」

「うん。わかった」

「飲みすぎるんじゃないぞ」

「はい」

お父さんとお母さんに見送られて、駅まで早足で向かった。時間がないわけじゃない。むしろ少し早すぎるぐらいの時間だ。でも、みんなに……というより、将に会えると思っただけとしていられたかった。

電車で二駅。電車から窓の外を見れば、すっかり日の落ちた街並みに、雪が埃や泥を含み茶色く残っている。

雪の残る景色……。二年前の今頃も雪が降ってたよなあ。ほろ苦い思いが蘇よみがえる。それと同時に、将と再会したことで舞い上がっていた自分の滑稽こげさを思い知った。

「馬鹿だなあ。もう、振られてるんじゃない」

電車の中、小さな声で呟いた。

結構、待つんじゃないかと思っていたのに、集合場所には既に将を含めて数人が集まっていた。

「お、夏菜子はえーじゃん」

「げ、将が待ち合わせ時間より早く来てるなんて……、もう雪は勘弁してよお」

「お前、それどういう意味だよ」

「そのまんま、あんたがまともな行動をすると天変地異が起こるって意味よ」

顔を合わせて早々に言い合いを始めると、将と同じサッカー部だった男子が口を挟んできた。

「お前ら、変わらねーな。ずっと、こんな調子で続いてきたのかよ」
「続くんもなにも、今日が卒業して以来初の顔合わせだよ」

「はあ？ なにそれ、二年ブランクがあっても、変わらないってどんだけだよ」
そんな冷やかしに周りの同級生たちも乗ってくる。

「お前らって、そういえばいつも一緒にいたよなあ」

「三年間、同じクラスだっただけだろ。ただの腐れ縁だ」

高校時代、男女混合のグループを作るときは、大将将と久高君と一緒にだった。将とは三年間。久高君とは一年と三年のときに同じクラスになっている。

「腐れ縁」と言い切る将にチクリと胸が痛んだ。いつも近くにおいて、気兼ねなく言い合っ
て、一緒にいて楽だった。だから……

「そうそう、腐れ縁。私はサルの飼育係だったんだから」

「ふざけんな。いつ、俺がお前に飼育された？」

上手く笑えてるかな？ ちょっと自信がないけど、少しだけ泣きそうになった気持ち
を隠すように明るく言う。

「うわ、懐かしいっ！ さると飼育係。まあ、確かに。暴走するざるをいつも麻生が追
いかけてまわしてたよな」

そう。高校時代、私たちはサルと飼育員と擲^や擲^やされていた。

そんなやりとりをしているうちに一人、二人と人数が増え、まだ全員は集まっていな
いけど時間になったため居酒屋に移動した。

「それでは、みんなの成人と再会を祝して……乾杯っ！」

「かんぱーい」

重なる乾杯の声に、グラスを合わせる音。今日は成人式とあって、店内には似たよう
なグループがたくさんいる。スタートに集まったのは十二人。これから、まだまだ増え
るらしい。

久々の再会に最初はぎこちない雰囲気だったけど、空いてゆくジョッキの数に比例し
て、高校生の頃の気軽さが戻ってくる。近況報告は就活や学校の話が多い。

「でもさあ、実際のところ、お前たちってさあ。高校のとき、付き合ってたの？」

ふいに振られた話題は唐突すぎて、私は上手く対応できなかった。顔が強ばってしま
い、私たちの周りに変な静けさが訪れる。

「付き合ってたねーよ。こいつとは、どっちかというとなら友達感覚だったしな」

別の輪にいたはずの将が私の頭上から呆れたように言った。それで、私も取り繕うキッ
カケを掴む。

「そうそう、どっちかというとなら、人間じゃなかったし」

私も将の言い方に合わせて、冗談を口にする。それでも、手の平がじんわりと汗ばんだ。

「ふざけんなー」

「どっちがよ」

ジョッキを手にした将は下カリと私の隣に腰を降ろしてきた。再び、いつもの言い争いになる。なんだか変な感じがした。まるで他人のように自分を見ている私がついて、頭が空っぽのまま、口は勝手に将に文句を投げかけている。『男友達』。その言葉が重りのように心の奥にドンドン沈んでいき、息苦しくなる。苦しいはずなのに、私じゃない私はそのまま将と言い争いを続けている。まるでもう一度振られたみたい。わかっていたことなのに、ものすごくジョッキを受けている自分。

将にとって私は友達でしかない。今も、昔も……

あれは二年前。登校する三年生の姿もまばらな一月。

「夏菜子は専門だったよね？」

「うん。愛は女子大生かあ。推薦取れて本当によかったね」

「本当だよー。もう、すごい緊張したんだよ」

「聞いた。聞いた」

センター試験も終わり、多くの生徒が本格的な入試を控えたこの時期。既に進路の決まっていた私と愛は教室の隅で話をしていた。

「でもさー。夏菜子は木村と付き合わないの？ 絶対、相思相愛だよねー」

「さると？ ないない。だって友達だよ。あいつとなんかありえないよ」

進路が決まれば、そんな話題も出てくる。誰と誰が付き合っていると、別の大学になったから別れるとか。さるとのこと、口では否定しながらも、実はずっと好きだったりしている。バカみたいに騒いで、なんだかんだで一緒に出かけたり。

もう部活は引退したけど、サッカー部関係の買い物があれば一緒に付いていたり、ついでに映画を観たり。一緒に過ごした時間はどの女子よりもあると思っている。さるは久高君と同じ大学を志望していた。推薦で決まった久高君と違って、一般受験だからまだ決まっていない。でも、久高君が付きつきりで詰め込んだって言うてたから、多分大丈夫だと思う。

入試の結果が発表されたら、私は言うんだ。だって、このまま卒業したら会う機会もなくなっちゃう。そうなる前に気持ちを伝える。

よく友達からも付き合ってるのかって聞かれたし、さるが聞かれているのを見かけたこともある。否定はしてきたけど、さるに嫌われてはいないと思う。告白して断られる可能性はもちろんあるけど、何も言わずに後悔するぐらいなら、ハッキリと言うんだ。

進路が決まるまで悩んでたけど、専門学校に合格してから気持ちは固まった。三年間同じクラスだった、誰よりも仲のいい男子。周りに言われたからじゃない、多分一年の

頃にはもう好きだった気がする……。ハッキリといつかからなんて覚えていない。ただ、高校を卒業してからもずっと一緒にいられたらいいと思ってた。そう思うようになったのはここ最近だけど。クラス替えのたびに同じクラスになれたことに喜んで、バレンタインには義理とか言いながらチョコもあげたし。

もしかしたら、私の気持ちは気付かれてたりして？ それでもいい。ここまで来たら当たって砕ける。がんばれ私っ！

「さる！ ちょっといい？」

昼休み。クラスがざわついている中、変にこそそはせず、堂々とさるに声をかけた。

「あんだよ」

「ちょっと手伝ってほしいから来てよ」

どんなふう呼び出すかは結構考えた。面倒くさそうにしながらも席を立ったさるは廊下まで出て文句を言ってきた。それでも、ちゃんと来てくれるあたりが嬉しい。一月末。さるは無事に久高君と同じ大学に合格した。まずはお祝いからだよね。

「んだよー。さみーじゃん。外なら外って言えよ」

体育館に向かう連絡通路から脇に入り、体育館の裏に来た。積もるほどではなかったけど、午前中には雪が降っていた。それだけ寒い日だから、外に人の気配はない。そし

て、今日の五限にこの体育館を使うクラスはない。それも下調べしてあった。

「ごめん。すぐ済む……と思うから」

すぐって、人生で初の告白をそんなお手軽に済ませてもいいのかな？ でも、だらだらと喋るよりも、ストレートに好きって伝えたほうがいいよね。

「でっ」

さるはブレザーの袖を引っ張って、その中に手を収めながら、寒さをしのぐように腕をさすっている。サッカーやってるくせに寒がりで、普段は少し猫背。三年間、いろんなさるを見てきた。多分、誰よりも。

「あのね。えーっと」

寒そうにしているし、言うことは決まっているのだから早くしよう。私の予定ではあまり重くならないように、さらっと言うつもりだったのに、いざとなるとなかなか大事な一言が出てこない。

「んだよ。こんなところに呼び出して、告白かよ」

笑いながら言うさるに私はびっくりして、まじまじとさるのほうを見てしまった。その口ぶりからして冗談のつもりで言っているんだらうけど、まさか相手から今からすることを指摘されるなんて想定外。

「実は、そうなのっ！」

えーいつ、ここは度胸と勢いだ。このまま言っちゃえ。

「好きなの！」

体中を心臓が走りまわっているみたいに、全身がドクドクしている。本当なら地面でも見ていたかったけど、そうしてしまったら気持ちで負けているみたいな気がして、必死にさるの顔を見た。

「おい、おい。卒業間近のドッキリかよ。その辺にクラスの奴とか隠れてるんじゃないの??」

いつもの軽い口調で顔をキョロキョロと巡らせるけど、さるの目は泳いでいて、いつもとわずかに様子が違う。

私の一世一代の初告白を、なんでクラスの奴の笑いのネタにしなくちゃいけないのよ。「違う。本当なの。私、ずっとさるのこと好きだったの」

瞬きをしたさるの表情から笑いが消え、少しずつ狼狽へと変化していく。どうしよう、これはあんまりいい反応じゃないよね? もっと押す? それとも黙ってる? ぐるぐると頭の中いろいろな考えが浮かぶけど、どれも実行できない。

小さく「マジかよ」ってさるの声が聞こえた。嬉しいっていうよりも、困っている声音。「駄目……かな?」

耐えきれない。さるの反応を見ているのも辛くて、我慢ができずに問いかけてしまっ

た。だって、昼休みだって終わっちゃうし、中途半端な状態で放課後に持ち越しなんて絶対に無理。

「駄目っていうか……。俺、お前のこと……友達としてしか見れない」

ものすごく申し訳なさそうで、こっちが謝りたくなってしまうような態度だった。いつものふてぶてしいさるはいない。ちゃんと真面目に答えようとしてくれるのは嬉しいけど、無視するわけにはいかない言葉を聞いた。『友達』。それは、彼女になるには足りない関係。

「じゃあ、友達からでもいいから」

「もう友達じゃん」

冷静な突っ込みに思わず頭をかく。

「そっか、そうだよね。私、何言ってるんだろう。結構、テンパってるかも。あつ! じゃあ、えつとまずは二人で出かけてみたりは?」

「別にそれも今までもあったし、違いがわかんねーよ」

「だよね」

さらに追い詰められる私。あまり考えていなかった。私とさるは今でも友達で、予定が合えば別に二人きりでも出かける関係で、でもそこに恋愛は絡まなくて。じゃあ、付き合ったらどう変わるの?」

「友達じゃ駄目なのか？」

今更ながら、付き合うってことがわからなくなってくる。いや、もし付き合えたらとかいろんな想像とか妄想とかあったんだけど……あったはずなのに、今は頭が真っ白になって思い出せない。

「さるは……一度も私のこと女として見たことないの？」

質問に質問返し。今の状況ならば、友達でいようって戻れる。でも、口は勝手にさわどいことを聞いてしまった。

「……」

俯うつむいて、じっと考え込むさるに驚く。会話の流れからして「ない」って返答が来るものだと思っていた。なのに考え込んでるってことは、女として見ていたときがあったってこと？ それって、もしかしてチャンス？ 可能性ゼロじゃないってことかな。

「あんな、期待させること言いたくねーんだけど」

小難しそうな顔をして、さるは私のほうを見てきた。申し訳なさを浮かべている目に、高揚しかけていた気持ちが沈み始める。この先のさるの発言はあんまり喜べない。そんな気がする。

「ぶっちゃけ、俺二年のときにお前のこと……ちょっと気になった。好きとかわかんないけど、多分好きだった」

それって、もしかして去年告白してたらOKだったってこと？ そのときは両思いだったってことじゃん。

「え、待って。じゃあ、今は？」

さっきから混乱しっぱなしで、思考回路が全く働かなくなってしまった。

「今は……友達」

ガクリと肩を落とす。去年は友達以上の感情があったはずなのに、今は友達でしかない。それって、本当に希望はないの？

「なんで今は友達なの？」

それを聞かずに納得なんてしない。してやるものか！

「好きかなって思ったんだけど、それを言わなくても、普通に一緒に出かけてたし、好きとかそういう感情に振り回されなくなかったっていうか」

それは私も思った。だけどさ、恋愛の醍醐味だいごみって、相手の言動に一喜一憂したり、そういうものじゃないの？

「俺、認めたくねーけど、多分ガキなんだよ。だから、そういうのよりも友達と一緒にいてワイワイ騒いでるほうが楽っていうか」

がんばれば届きそうな気持ちがあつてもどかしい。

「でも、やっつてることは変わらないとしても、気持ちの繋がりとか、一緒にいるときの

安心感とかさ」

「必死に『お付き合い』のいいところを探そうとするけど、まだ一度も誰かと付き合い合ったことのない私には説得力のある言葉を見つけれない。案の定、さるはピンとこないようだ。」

「去年、もしかして、お前も俺のこと好きなんじゃないかって思ったりしたんだけど……」
「だけど？」

なんて心臓に悪いんだろう。諦めたらいいのか、もう少し粘ってがんばればいいのか、全然見当がつかないよ。思わせぶりなさるの言動。でも冷めている表情。

「怒んなよ」

少し怯えた様子で、私を窺^{うかが}ってくるから、できるだけ普通の顔をして領いた。

「……なんか面倒になった」

もう一度がつくりと肩を落とす。

「高校生だよ。もうすぐ卒業だよ。今って青春のど真ん中だよ。それなのに恋愛が面倒って……もう、いいっ！ 忘れてよ。私にここに来てから言ったこと全部忘れて」

「だから、怒るなって……」
「怒ってないよっ！」

怒鳴り返している時点で怒っていないって言う自分に矛盾を感じたけど、冷静でいら

れる状態ではなかった。考えたらわかる。さるは私の言ったことに対して、さるなりにちゃんと答えてくれたんだ。そうだよ、完全に私の逆切れだよ。振られたことに対してのね。

「ごめん、先に教室戻る」

ここで涙の一つでも流せば可愛い女の子になれたのかもしれない。でも、大股でドカドカと歩く私は全く可愛くない。これじゃあ、いくら付き合いが長かったってダメだよ。振り向いて確認することはできないけど、多分さるは困っていると思う。一晩寝たら、私もちよつと落ち着くだろう。明日にはいつもの私に戻る。

私が教室に戻って少し経ってから、さるも戻ってきた。この日、学校にいる間、さるとは目も合わせられなかったし、会話もできなかった。それはさるも同じで、私の様子を見てわざとタイミングをずらしているように思えた。

家に帰って、布団にもぐると一人で反省をした。さるはまだ恋愛よりも友達と遊んだりするほうが楽しいってことなんだ。なら、今日のことには水に流して普通に友達として付き合っていけばいい。それで、いつかさるが恋愛をしなくなったときに、さりげなくアピール。うん、これでいいじゃん。

単純な私は自分がさるにとった態度も忘れて、スッキリしてから眠りに就いた。まさか、あれが最後の会話になるなんて思いもせずに。

翌日、少し緊張しながら教室に入り、できるだけいつもと同じ調子でさるに挨拶しようとしたら、私が入るのと同じタイミングで、さるは別のドアから教室を出ていってしまった。

たまたまだと思っていたのに、一日中そんな感じ。さるの席へ近づこうとすれば、急に近くのクラスメイトと喋り出したり。

いくら鈍感な私でも気付く。私、さるに避けられている。目を逸らされて、視線を合わせることも叶わない。まさか、こんなことになるとは。いや、振られたらそうなるかもって思ってたけど、二年のときには友達以上の感情があつて、今は友達の関係がいいって言ってたから、そのまま友達に戻れると思ってた。

諦めの悪い私は、少しの間のことならば仕方がないと待つことにした。いくらなんでも、卒業まで口をきかないわけじゃないだろうし、今、私から無理に行けば余計に逃げられちゃいそうだし。

少し時間が経てば今までと変わらない一日が来て、さるや久高君と冗談を言い合つて、卒業までの短い時間を過ごせるものだと思ってた。さると久高君は地元の大学だし、卒業してからも会おうと思えば会える距離。だから、友達として一緒に遊んだり、そんな関係がずっと続くんだって。

卒業式の日。一度だけ、さると目が合った。何かを言いかけたさるは迷いを見せてから目を逸らした。それが最後。久高君は何かあったのかときりに心配してくれたけど、言えるわけがない。告白をして振られて避けられているなんて。女子ならまだしも、さるの幼馴染に、そんなこと言えない。言葉を濁して、久高君と別れの言葉を交わした。

告白なんてするんじゃないやなかった。友達のままでもよかったのに、余計なこととして関係を壊しちゃった。友達なら今頃、一緒に卒業だって騒いでいたかもしれない。時間を巻き戻したいって後悔ばかりの卒業式。

「もう、そんなら、今からでも付き合っちゃえよ。二年も経てばお互い変わってるだろう。」
回想と現実が入り混じる。昔もそうやってよくからかわれた。大げさに否定しながら、心ではそうなることを願っていた。そして、今は……。そう、成人式が終わってから集まって、飲みに来ていたんだって。

「それこそ、残念でした。俺、彼女いるし」

決定打。滅多打ち。完敗。気付いちゃった。私ってば期待してたんだ。二年も経てば気持ちが変わってるんじゃないかって。あんなことがあったのに、今日は昔と変わらずに接してくれたから。もしかしたらって、頭のどこかで期待してた。

「わ、私だって、告白されてるし。多分、付き合うし」

「はは、よかったじゃん」

そう言った将のほうを見てしまった。ほんの一瞬だったけど、ほっとしたような顔をしていた。今でも私が将を好きだったらどうしようって思ってたのかな。そのとおりだったんだけど、やっぱり困るよね。彼女いるんだし……

「そうよ。私の魅力に気付かないような男に用はないわよ」

あまりきつい口調にならないように気をつけて、それでいて将を安心させるようにきっぱりと告げた。安堵と少し傷付いたような将の顔……。卑怯だな。いや、私が勝手なだけか。

でも、これでよかったんだよ。いくらなんでも引きずりすぎだよ。将にだって彼女がいるんだし、私だって、いい加減すっぱり忘れなさいといけなかつたんだよ。だから、今日会えて本当に……よかつた……

それから、結構な勢いでチューハイを飲んだ気がする。まだ、自分の限界がわかるほどお酒を飲んだことはないのに、飲まないと将と同じ場にいられない気がした。

「夏菜子ってお酒強いのか？」

隣に座った愛にそう聞かれた頃には、私の意識は大分怪しくなっていた。ちゃんと、誰とどんな会話をしたかも覚えてるし、まだ自力で家に帰れるとは思って。だけど、多分今までで一番お酒を飲んでる気がする。いや、間違いなく今日が最高記録。私って

何気にお酒に強いのかな？

「そろそろ、このお店出るけど、夏菜子は二次会どうする？」

「私、あんまり遅くなると親が心配するから。そろそろ帰るよ。愛は？」

「私は気楽な一人暮らし。その上、ここから近いから、とことん行くよ」

愛はそんなにお酒に強くないからと控えめに飲んでた。でも、飲み会の雰囲気は大好きと言うだけあって、ペロペロになつてる男子と肩を組みながら歌ったりとノリがいい。

「もう成人したつていうのに、親の心配なんて夏菜子らしい。帰り、誰か男子つけようか？」

「ううん。平気。家に帰れるぐらいの意識はあるから」

笑ってみせると、愛はそれ以上は言わずに、テキパキとお金の徴収を始める。本当は親が心配するなんてことはない。遅くなつてもいいって許可が出てたぐらいだし。でも今日は打ちのめされた気分で、これ以上将の顔を見ているのが辛かった。

「じゃあ、今日は楽しかったよ」

「おう、今度は誰かに同窓会企画してもらわないとな」

駅で別れの言葉を交わし、二次会組と帰宅組はそこで別れた。本当は電車なのに、私はコンビニに寄りたいからと嘘をついて、帰宅組とも別れる。

一人になりたかった。人に合わせて会話をするのも限界だった。家まで二駅。歩くと四十分。結構な距離だけど、なんだか歩きたい気分だった。

駅前の賑やかさが徐々に住宅街の静けさへと変わる。静かな道を歩きながら、自分の吐き出す白い息を眺め、空を見上げた。空気の澄んでいる冬はよく星が見える。だけど、今日は満月の明かりが強くて、少し星が少ない気がした。

「明るすぎだよ、月……」

空に向かって声と白い息を零すと、つーつと頬を雫が伝った。鼻をすすると、つーんとした痛みが走る。

「はは、泣いてる。二年越しで振られてやんの」

自嘲の言葉を呟くと、さらに涙腺が緩んだのか、一気に涙が溢れ出した。バッグからミニタオルを出して涙を拭く。でも、拭くと次の涙が溢れる。

もう、これで将への気持ちは区切りがついた。今は悲しいけど、いいじゃん。これでも私も前に進めるんだよ。彼氏を作ったことがないからいけないんだよね。バイトに行ったら返事をするんだ。それで付き合ってみればいいんだよ。

やっぱり、失恋には新しい恋だよ。ドキドキやワクワクは付き合ってから来るかもしれないんだし、まずは進もう。

そう心に誓い、寒空を見上げて、私は結局ずっと泣きながら家まで歩いた。

二 新しい関係

専門学校卒業式も終わり、社会人になる直前の春休み。いろいろと準備を進めてはいても、働き始めることへの実感はないまま四月に入ろうとしていたとき、意外な人物からメールが届いた。

『この前、二次会で夏菜子ちゃんの就職の話聞きました。就職祝いに飲みに行かない？もちろんおごるよ』

送信者は久高君で、最後に将の名前も入っていた。メールの内容を素直に受けとめるならば、久高君と将と私の三人で飲みに行くことになる。そんなの、将の彼女は許すんだろうか？

早々に彼氏と別れてしまった私は、恋人というものをいまひとつ理解できていない。一緒にいて感じた違和感。何かが違うという思いが日々大きくなっていて、彼が見せてくれる好意すら苦しくなってしまった。結局一ヶ月後、私の初めてのお付き合いは初エッチの日に終わりを告げた。いつか、違和感がなくなると、一緒にいることが自然になつて、好きだと思える日が来ると思っていたのに。

告白をされたことで浮かれた気持ちもあつたんだろう、いつか彼に対しての気持ちも芽生えるんじゃないかという期待もあった。でも彼を好きになれないと悟った途端、急に彼の好意が怖くなってしまった。将を忘れるために彼を利用してしまったという罪悪感。時間をかけてみようと、何度も言われたけど、私は一方的に逃げ出した。そのとき、頭に浮かんだのは……

散々、悩んだ挙句、私は久高君の誘いを受けることにした。将のことをふっさされたのかどうかはわからない。ただ、なんとなく大丈夫な気がしたのだ。

その予感も、当たったことになるのかな。お祝いをしてくれる二人とお酒を飲みつつ、会話の端々に出る将の彼女の話を聞いてもそれほど胸が痛まなかった。すんなりとは言えないけど、受け入れている自分がいた。今時っぽい付き合いというとおぼさん臭いけど、将とその彼女はけっこう気軽な付き合いをしている印象だった。でも、楽しそうにしているのはわかった。

将の彼女は、自分も将以外の男の子と遊びに行くことがあるから、将が他の女の子と会うことも変に隠したりしなければそれほど気にしないらしい。私には理解できない。でも、私のそういう頭の固さが彼氏のできない原因なんじゃないかと思ってしまう。

久高君は高校時代と同様、女性が苦手らしく、大学でも特に女友達を作らず、彼女が欲しいという気も起きないらしい。将よりもすっかりしていて、顔も悪くないのにもつ

たいないって思ったけど、私の言うことじゃない。

変に馬が合うというか、将と久高君と一緒に過ごす時間は気兼ねもいらず、あつという間に過ぎていった。

結局、二人とは飲み友達みたいな関係になり、就職してからもたまに昼間遊んだり、夜に居酒屋で会ったりしていた。

「それにしても、毎回お前の顔見てもなあ。誰か可愛い子でも連れてこいよ」
「彼女持ちのくせに随分なこと言うじゃない。彼女にチクるわよ」

将の彼女の連絡先なんて知らないからそんなことできるはずもないけれど、文句の一つも言いたくなる。どうにも言動が軽薄なんだよなあ。将の彼女になるには、相当大きな心を持ってないと無理っぽい。

「言うぐらい、いーじゃねーかよ。お互いに楽しければいいんだし。彼女と一緒にいる時間はちゃんと取ってるんだぜ。それ以外のところは口を挟まないのが暗黙の了解」

「そういうのが私には理解できない」

「それに関しては僕も同じ」
「ほー！」

いつもの会話のパターン。私が将の理解できないところを指摘すると、さりげなく久

高君がそれに同意する。そして、将は……

「はいはい。俺が悪かったよーだ」

一人むくれてお酒を頼む。私と久高君は笑って、その場は収まる。

「でも、二人に会わせてみたい子がいるんだ。うちのお店に一緒に入った子なんだけど、私とは違って、ちょっとセクシー系でね、中身は男らしいの。一緒にいて飽きないっていうか」

うちのお店には私以外にももう一人、今年の新卒採用として入っている。最初に向こうから声をかけてくれて、それから短い間にいろいろと喋るようになった。見た目はとてもおしゃれでキレイなのに、性格はサバサバとしていて本当に男っぽい。ズバツと言いたいことが言えるところが羨ましい。

「いーじゃん！ 巨乳ちゃん？ 俺大好き。ウエルカム！ なあ、隼人」

むくれた状態から瞬時に復活すると将は身を乗り出す。それから久高君の肩を抱いて同意を促した。

「そうだな。巨乳とかは置いておいて、夏菜ちゃんと馬の合う友達っていうなら会ってみたいかな」

「今度誘ってみるよ。多分、来てくれると思うから」

「俺はその日を楽しみに日々を過ごすさ」

将と久高君と私。三人での飲み会に私の同僚、三島咲季みしまが加わったのは、それから一ヶ月もしないうちだった。声をかけたら二つ返事で領いてくれたので、お互い仕事の都合のいい日を決めて、学生の将と久高君にはこっちの都合に合わせてもらった。

「どうもー、夏菜子と同じお店の三島咲季です」

「どうもおー！ 俺は木村将。将って呼んでね」

ノリのいい咲季は顔を合わせるなり、すぐに自己紹介をした。その調子に合わせて将も頭の軽そうな自己紹介をする。

「久高です。久高隼人。夏菜子ちゃんとは高校時代からの友達。さるとは小学校からの腐れ縁」

「え？ 本当にさるって呼ばれてるの？」

クスクスと咲季が笑うと将は必死に言い訳する。

「それは、学生時代のあだ名で、って今でも学生だけ……。とにかく、今はさるって呼ぶのは隼人だけだから、咲季ちゃんはずっとも将って呼んでね」

こんな性格だったのかと思うぐらいの軽い調子に私は呆れてしまう。さすがに慣れているのか、久高君は気にした様子もない。

「えー、いいじゃない。私はさる君って呼ばせてもらおうわ」

半分、将の反応を楽しんでいるのだろう、咲季は『さる君』と連呼する。その呼び方がかなり気に入ってしまったみたいだ。

「じゃあ、もういいよお。さるでも」

「なんか、夏菜子から話を聞いて、楽しそうな感じだと思ってたけど、本当に面白いわね。さる君の軽さと隼人君の落ち着き具合のバランスが」

今日初めて会って、少し会話をしただけなのに、的を射た意見で思わず頷いてしまった。自分の友達同士を会わせるなんて初めてで、どうなることかと少し緊張していたのに、私の心配などいらぬほどに会話は弾む。

といつても、主に喋っているのは将と咲季の二人。将のおバカな発言に対して鋭すぎる咲季の突っ込みのおかげで、腹筋が筋肉痛になるほど笑った。結局、この日は零時過ぎまで飲み続け、そのあとカラオケに移動して朝まで遊び歩き、私はほとんど寝ずに仕事へ向かうハメになった。

そんな付き合いが一年も続くと、まるで咲季までもが高校時代からの友達のように馴染み、春になればお花見をして騒ぎ、夏にはデイキャンプに花火、秋には紅葉狩り、冬にはスノーボードへ行つた。

目の前に海。あちらこちらにカラフルなパラソルが立つ。そんな一つのパラソルの下

で、海に濡れた体を乾かしながら、かき氷を手にする私たち。

「俺もあんまり人のことは言えないんだけどさあ。咲季ちゃんもあんまり彼氏と長続きしないほう？」

「んー、一緒にされるのは心外だけど、まあそうねえ。合わないと思つたら、もう駄目」この就職難のご時世、大学生は大変な時期なんじゃないかと思うのだけど、将も久高君も付き合いはよかった。どうやら久高君のほうは去年の冬に内定をもらっていて、将のほうもほぼ決まっているらしい。二人とも優秀なほうなのかもしれない。

そんな大学生の二人と、海に遊びに来ていた。

「夏菜子も二十二歳。例の彼と別れてから、浮いた話を聞かぬーな」

「私はあんたと違って、そんなにほいほい軽く付き合い合えるわけじゃないのよ」

成人式のあとに付き合い合った彼のことを未だに言われてしまう。でも、一ヶ月で別れたということとは、将と久高君には言えなかった。咲季を二人に紹介したときにも、まだ彼氏がいることにしてもらっていた。しばらくしてから、いい加減、彼氏がいるふりをするのに疲れて、別れたことにしたけど、それから新しい恋は訪れていない。

「俺だって、軽く付き合い合ってるわけじゃねーよ。付き合いときには、こいつとずっと一緒にいるってつもりで付き合い始めるんだからさあ。なあ、咲季ちゃん」

「だから、さる君と一緒にしないでくれる。……まあ、確かに最初から別れるつもりで

は付き合わないけどね。夏菜子は慎重すぎると思うわよ。付き合ってみないとわからないことだってあるし、絶対大丈夫なんて保証はどこにもないんだから」

彼氏と別れたと伝えてから、妙に将は彼氏を作れとうるさく言ってくる。ものすごい未練があるわけではないけど、ひっそりと将を思っている気持ちがある私の中に残っている。それを感じて遠回しに牽制しているのではないかと疑ってしまうほど。

将と咲季は付き合いに対する考えが似ているようだ。咲季はあまり認めたらならないけど、将は咲季のことを同類だと思っているらしい。そんなやりとりを見ていて、羨ましいと思うけど、だからといって二人のように恋愛に積極的にはなれない。

「よし。じゃあ、今度、咲季ちゃんが彼氏とお別れしたら俺と付き合わない？」

私と咲季の会話を将が口を挟んできた。似ている二人だけど、二人が同じ時期に恋人がいなかったことは今までにはない。

「その前に、さる君に新しい彼女ができてそうじゃない」

将は真剣に考え込み、小さく唸り声を上げる。本気で悩むところなのかと突っ込みたくなるが、そういう性格だから仕方がない。

「確かに。咲季ちゃんが今の彼氏と長く続くとは思わないけど、その前に俺が運命の人と出会う確率のほうが高いっ！」

私と久高君は同時にため息をつき、咲季は楽しそうな笑みを浮かべる。

「やっぱりね。だって、私と一緒にすることは、一人でいることが寂しくて耐えられないでしょ。多分、すぐにでも次の彼女を作ろう。いっそ、さる君が夏菜子と付き合いええ。見た感じ、お似合いよ」

「やめてよ、咲季！ 私はさるの飼育係なんてゴメンなんだから」

いつになく棘のある言い方になってしまったことに自分で驚いた。

「私は……好きな人ぐらい自分で見つけられるもん」

「まあ、夏菜子ちゃんがその気になれば、自分で動けるからご心配なくってところだね」私の一言で変な空気になったところを久高君が上手い具合にフォローしてくれた。心の中で大きなため息を零し、反省をしつつ、久高君をちらりと見る。大丈夫だよって言うてくれるようなウインクに私はペコリと頭を下げた。

「さーと、かき氷も食べ終わったら、もうひと泳ぎしようよ」

「賛成っ！ 俺は焼く！ こんがりと美味しそうならに焼く！」

パーカーを脱ぎ捨てると、誰よりも先に将は海に向かって走り出した。その様子を私たち三人はのんびりと眺める。

「あいつ、彼女に最近振られたばっかりでちよつと寂しいんだよ。変なことばっかり言うてるけど許してやって」

久高君は静かな口調でそんなことを教えてくれた。彼女と別れたという話は将が自分

でしていたから知っている。いつもの調子で喋っていたからあまり気にしていなかったけど、それなりにヘコんでいるのか。

海に飛び込んだ将。一人で波に向かっていく後ろ姿。無邪気で子供みたいな将がこれから社会に出て、どう変わっていくのか。就職はしたけれど、あまり変わらない私。私はいつ大人になるんだろう。いつ、将から卒業できるんだろう……

この四人の学生みたいな付き合いはいつまで続くんだろう。永遠に続くとは思えない。来年には、将も久高君も社会人だ。今までみたいに私たちの都合に合わせてもいられなくなる。そうなればやっぱり、遊ぶ機会も減るだろう。それでも、できるだけ長く、付き合いが続けばいいと思う。

冬が近づき、卒論に忙しくなる二人。それに、いつまでも新人気分の仕事をしていられなくなってきた私と咲季。それぞれに少しずつ状況が変わり始めていた。

久高君は結構な大手企業に就職が決まり、将も地元で手広くやっている企業に就職した。そして、少し落ちてきてきた六月。久しぶりに四人の都合が合って、将と久高君の就職祝いをするために集まることになった。

「就職おめでとぅっ！」

「ありがとうー！ これで俺も社会人の仲間入り！ って言っても全然実感ねーわー」

「あんた、社会人になったなら、その学生っぽいバカな喋り方をまず直したほうがいいわよ」

「あー、それ注意されたわ。つい『わかったっす』とか言っちゃうんだけどさあ。研修の先輩がちよー厳しいの」

怒られたと言いながらも、相変わらずだらしのない喋り方をする将を見ると、思わず採用した会社に同情したくなってしまふ。

「久高君のほうは研修とか厳しいの？」

「うーん。研修が三ヶ月あって、まだ一ヶ月残ってるからね。あんまり、就職した感じがしない。授業の延長みたいで、講習が多いからさ」

みっちり三ヶ月もの講習というのは想像もつかない。私だったら確実に居眠りをしてしまいそうな気がする。

「そっか、じゃあゆつくりできるのは今のうちだけかな？」

「どうか。でも今更だけど、夏菜子ちゃんや咲季ちゃんのことをちよつと尊敬したよ。働くって大変なことだって、まだまだな段階なのに思ったからね」

久高君みたいな真面目な人は仕事場で使えるようになればさぞ重宝されるだろう。バリバリ仕事をやっていく姿が想像できる。

「それは俺も思った！ だって、夏菜子も咲季ちゃんも俺らと同じノリで遊んだり飲ん